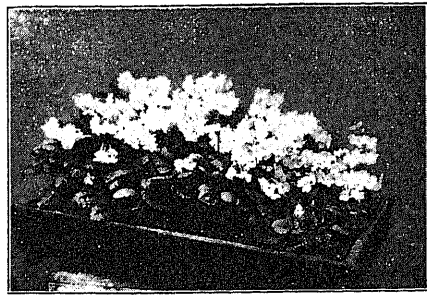


花壇並に花壇用草花年中行事

—二月—

日比谷公園花壇掛

富 本 光 郎



花壇並に花壇用草花について私の今まで日比谷などにおける浅い経験を基としてその月々に於ける夫々の必要行事を書いて見る事にいたします。大體露地栽培草花なので子供にも作れる様なもの多く聊かなりとも御参考になれば幸と思ひます。

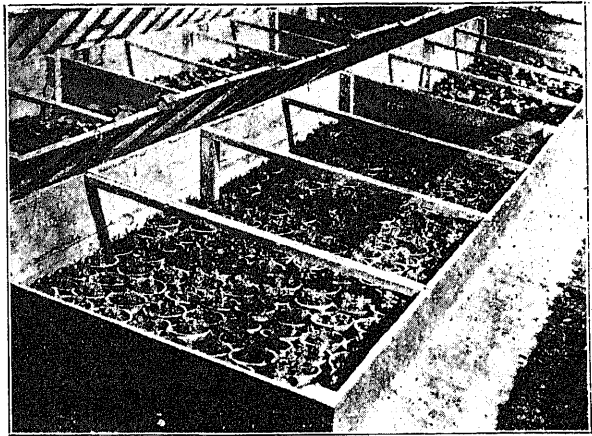
草花苗床の手入

春になつて花壇に植出す草花の苗の中宿根草又は秋蒔きの二年草の中でも丈夫なものは放置のまゝであるが東京附近では大抵のものは（バンジー、金盞花、ストック、アリッサム、シレチ、金魚草等）霜除の下で育てられているのが普通であるが、冬季はさうしても手入れが怠り勝になつて雑草病蟲害等に侵され思はぬ失敗を招く事があるから常に見廻つて注意してゐなければならない。

又霜除下は非常に乾燥するもので土質にもよるが時々
の灌水を忘れない様にする。

フレームの管理

花壇用の草花でフレーム（普通護熱物なぞの入れてない冷床）内で培養してあるものはシキリヤ、マガレット、ベゴニア、センバフローレンス、ライナム、シザンサス、ゼラニウム、プリムラ、メラコイデス、姫松葉菊等であるが是等のものには半月に一回位の割合で油粕の腐熟液の極く



稀薄なるものを施してやる様にす

る。
又花壇に
植出すには
出来るだけ
莖葉を丈夫
に育て、お
かねば春に
なつて強い
光線に當る
まぐつたり

ミ萎れて見にくいものになるから少し位寒い日ならば晝間は硝子障子をすつかり外してよく光線に當てしつかり
ミした苗に仕上げる様にする。然し此月は最も寒氣の烈しい時季であるから夜はびつたりミ蓋をして莖や苔などの覆もの一枚位今までより多くして寒さに害されぬ様に

してやるこゝが大切である。

移植を忌むもの、鉢植

此月の下旬頃からは次第に暖氣も加はり植傷みも少なくなるから移植を忌むもの例へばアリッサム、ストック、けし、ひなげし等の苗床にあるものの鉢植を開始する。これだけ書いたのでは判り難い事と思ふが總て花壇用草花は可成々長して蕾が見え始めてから花壇に植出すものなのでそんな大きさになるミ前記の様なもの床から直ぐ移植するミすつかり傷んで甚だしいものはそのまゝいじけて枯死する様なこゝがあるのであまり大きくならない中に鉢植にしておき、その時期までに、鉢一杯に根を張らしてそれをすつほりミ抜いて植付る様にするのである。

移植を最も嫌ふもの例へば秋蒔では花菱草、ネモフィラ、スイトピー、ホリック、ルピナス、等春蒔では鶏頭、葉鶏頭等は始めから花壇の適當な場所に直播するか又は鉢蒔ミしておくので美しい花壇を造るためには是等よくその草花の性質を知つておかねばならない。

其他移植を嫌はないものでは小さい時に一回大きくな

つてから一回位必ず植換を行つて細根を十分發生せしめておくべきものである。

培養土の調製

總て觀賞植物が立派な花を開くか開かないかはその培養土に左右される事多く殊に鉢栽培のもの特に菊、朝顔、薔薇などには夫々そのものに適切な培養土を造つておく事が最も大切な仕事とされてゐる。それでこの開期を利用して落葉、古葉、鷄糞、其他塵埃等を全部一ヶ所に堆積して土部から人糞尿汚水油粕液等を注いで時々切返しを行へば立派な培養土が出来る。然し落葉の新らしいものなきはよく腐敗して土の様になるまでには約一ヶ年位は要するので今年堆積したものは翌年使ふ様にし順次毎年調製しておくのである。

花壇の耕耘

花壇内で宿根草球根類其他何も植込んでない部分は今のうちに十分耕耘しておく。これは土壤の風化作用を十分にすればかりでなく病害蟲の細菌等を死滅せしむる效が

あるのでは非行つておくべき作業である。

又土壤を肥沃にするために人糞尿其他の肥料を十分撒布しておくのも必要な仕事の一つである。

櫻草の根分植付

大體櫻草は殆ど全世界にその野生種があり採集改良されて現在では三百餘種類に及んでゐるもので日本にも二十餘種類産するのであるが此處に云ふ日本櫻草といふのは荒川沿岸などに一面に野生していたものを江戸時代に盛に栽培し改良して數百に及ぶ園藝品種を持つに至つたものについてであつてこれは實に世界に誇るべきものでその形容その色彩の多種多様なものも品位あるつましやかな風貌は何人の嗜好にも適するものである。

此ものゝ根分植付は今月行はれるのが普通で紀元節前後十日間位が最適とされてゐる。色彩は大體淡いもの多く又露地植としては性質の弱いものなので花壇用には不向で鉢植として觀賞するに適してゐる。

大體徑五、六寸位の本焼鉢に三芽位植込むのが昔から行

蓋をこり徴が出て居りますれば又攪拌してそのまゝにしておき後徴が出なくなりましたならば既に肥料は充分腐熟したのでありますからこり出して一日位日當に乾しそれからカメナリ桶なりに入れておき適宜使用すればよいのであります。

ロ、液肥

乾燥肥料の外に出來得れば液肥も用意しておきたいと思ひます。

液肥には油粕、鯨粕、 \wedge 粕いづれもよろしく是に約五倍の水を入れて蓋をしておくのであります。只今用意しましたのは三月末か四月頃から使用出來ます。未熟のものは害がありますが腐熟しすぎるこいふ事はないのであります。又この腐熟に要する日数は季節によつて異なり夏季には三、四週間で充分使用する事が出來ます。しかして使用に當りましては草花の種類により、發育の度によつて更に上澄液を十倍乃至三十倍に薄めてやるのであります。施肥の注意は濃すぎたものより薄いものを度数を多くする方が效力が大なものであります。

(四八頁よりつづく)

はれてゐる方法であるが三寸位のものに一芽植えてよし又形の變つた滋味のある平鉢に配置よく澤山寄植にしても又面白いものである。

土は軽いものを好むので大體腐葉土七、荒木田二、砂一位の割合に混じたものが用ひられ、肥料は他の草花に比べるこ極めて少量でよいのであまり施し過ぎるこ直ぐ肥料負けしていぢけてしまつたり又窒素質のものが過ぎるこ葉ばかり伸びて仕方のないものなので植付の時根から少し離して腐熟した油粕、又は米糠等を極く少量入れてやるだけで後は花の終つた時薄い液肥を二、三回施せば十分である。

性質として寒氣に強く暑氣に弱く乾燥を忌むものであるから冬は其儘露地に置いてよく夏は鉢の儘土中に埋め込んで半日蔭にしてやる事が大切である。